

成島信遍の対俳壇教訓

久保田，啓一

<https://doi.org/10.15017/4741887>

出版情報：雅俗．5，pp.30-33，1998-01-10．雅俗の会
バージョン：
権利関係：



成島信遍の対俳壇教訓

久保田 啓一

成島信遍に「子姪に誹諧をいましむるふみ」(以下「子姪」と略)という一文がある。津村正恭の『片玉集』前集卷十九、大田南畝の『三十輻』に収録され、幕末には『甘雨亭叢書』にも採られて相応の流布の跡を見せているが、

此書は先師成島信遍翁しるして子姪に給ひぬるなり。さるよし久しく聞わたりぬれど、家庫の集に見えざればむなしくて年月を経たるに、こたび^信のぬしもとめ出て、その家にもうつし伝ぬるつゝ、和鼎ぬしに借得てうつしをく事とはなしつ。

寛政十二年神無月下旬涼庵しるす

と『片玉集』本の奥書にあるように、信遍生前にはごく少数の人しか目にはしていなかった。当の成島家にもなく、某氏によって見出されて写しがもたらされたくら

いであるから、和鼎達に示された後、誰かの求めに応じて貸し出されてそのままになったのであろうか。それはともかく、俳諧の排撃に終始する形を取りながら自己の見解を展開する内容は豊富な情報を含む。その和漢の文学論の部分は既に検討を加えたことがあるが、俳諧否定論の主要部にはまだ十分な言及がなされていないようだ。当時の江戸俳壇とはほとんど無縁だった信遍の個人的な批判は、場違い・的はずれとして無視に近い扱いを受けるしかないのであろうが、公刊された俳書のいくつかに信遍が序跋の類を寄せ、しかも「子姪」の主張と軌を一にする論を堂々と展開するのを見る時、信遍の強烈な批判を巻頭や巻末に据えてなお俳書として出版することを辞さなかった編者達のあり方とともに、信遍の俳諧否定が俳壇に対する公的な宣言であり、自らを高みに置く信

遍が教訓の意識で書いたらしいことの意味を考える必要があるのではないかとの思いを強くする。俳諧を峻拒する信遍が俳書に文章を寄せるに当って、俳壇に何を求めたのか。元々は文字通り身内を相手に吐露すればよかった所論を同趣旨のまま凝縮して公刊させるといふ行為に出たのはなぜなのか。以上のような問題設定で信遍と俳諧の関係を読み解く作業の緒となればと考えている。

そもそも信遍はどの俳書に関与したのか。松字文庫、酒竹文庫、綿屋文庫、柿衛文庫の目録を通覧して、信遍が序跋類を寄せた享保〜宝暦の俳書を検索したところ、左記の三点を探り得た。

① 石仲子守範編『画図百花鳥』（享保十四年刊）所収「百花鳥序」（享保十三年八月撰文）

② 春來編『東風流』（宝暦六年刊）所収「春來氏俳諧引」（宝暦五年十一月撰文か）

③ 敲柳編『俳林不改楽』（宝暦八年刊）所収「題俳諧不改楽」（撰文時不明）

ちなみに既刊分の『関東俳諧叢書』（加藤定彦氏・外村展子氏編）も見たが、補い得るものではなく、あくまで管見に入った分とはいえ、信遍と俳壇との接点が、この

三点以外に大きく広がる可能性は低いように思う。

さて、このうち①の「百花鳥序」は、既に全文の翻印をすませ、狩野派の画本としての側面への言及に終始して俳諧に一切触れないという特異さを指摘してもいるので、ここでは繰り返さない。ただし前稿では序撰文の依頼を仲介した瀾雪叟について何も述べずに終わったので、彼が宗瑞の従兄に当る岑水であることを念のため申し添えておく。②の春來は、収録歌仙の発句が調和の作の場合、「調和」と特記するし、③は他ならぬ調和の発句集であるから、少なくとも宝暦期成立の二点は、調和以来の江戸俳壇の系譜を意識して編まれ、その流れに身を置いた俳人達の人脈から信遍が江戸文壇の一代表として選ばれたと見てよいのであろう。

しかし、信遍の寄せた文章は、編者春來や敲柳を当惑させたに違いない。②の「春來氏俳諧引」では、

甚^{シイカナ}矣^イ今^{イマ}ノ俳諧ノ之行^{ハルヤ}于世^ニ也。上^上ハ公侯相将^{トシテ}下^下ハ至^至リ富商豪民^ニ。及^及屠子乞丐^ニ之微^ニ。靡然^{トシテ}向風^シ。閨秀尼姑。紅女娼妓。往々^{ニシテ}成^レ家^ヲ閨門^ヲ。簪^ニ鼓^{スル}一世^ヲ者。茅葦輩出^{ハス}。

と、あらゆる階層に俳諧が受け入れられている旨を述

べながら、「閨秀」云々以下の部分に巧みに皮肉を交え、「簫鼓一世」に至って明瞭に俳諧の与える悪影響を指弾する姿勢を見せる。「俳諧」の本義の考証を並べたあとには、

迂ナルカナ 矣芙蓉子ノ不_レ知_二時好_一也。殆_三乎亡_二人情_一。其_ノ於_二俳諧_一。嘗_二乎亡_一知_二。何知_レ所_二是非_一。

と、現今大流行の俳諧が今の人情を知るに足る存在であることを認めつつ、自分が無縁である旨をむしろ誇らしげに宣言する。編者春來が本書で見せた復古の態度には共感するが、引の依頼の仲介に当った「門生博多」(集中に見える「百太」を漢文に適した表記に改めたものか)の不誠実には容赦なく筆誅を加える信遍の姿は、少くとも温厚な一面を見つけて来た筆者には異様ですらあった。

門生博多_{ナル}者。謁余_ニ一言_ヲ。遂_レ援_{キテ}筆_ヲ而成_シ引_ヲ。授_二博多_ニ。居_{ルコト}亡_レ何_{クモ}。博多_ヲ為_シ異物_ト。日_ニ所_レ授_二稿烏有_一。頃_ニ致_{シテ}書_ヲ請_フ復_{予_ニ。々曰_ク。吁春來不_レ諫_{シテ}於_二智者_一。諫_ニ昧者_一。予_ニ已_ニ悲_シ博多之不_レ造_ヲ。且_ニ愛_ス春來氏之好_{ムヲ}。古_ヲ乃_チ塗_ニ抹_{シテ}}

数語_ヲ。贈_レ之_ニ。

「塗抹数語」する前の文章はもっと激烈であったに違いないが、少くとも博多の不実には触れていなかったはずである。俳諧を拒否する文言にもっと過激な表現があり、それを博多が忌避するのをもっともな状況ではあったのだろう。この博多の賢しらが、取り返しのつかない反撃が春來を襲う契機を作るとは、思い至らなかったのだろうか。

③の「題俳諧不改楽」では、まず俳諧の遊戯性と猥雑さが指摘された。

盛行_ニ王侯貴人ノ之間_ニ。以_テ代_ヘ酒令_一。充_ツ饋牽_ニ。其放蕩_{ナル}者。吊_{スル}譎_ヲ者。寒酸_{ナル}者。靡慢_{ナル}者。中輩_ノ之不_レ可_{カラ}言_フ者。捧腹無_{ナル}絶_一者。猥雜何_リ予_ニ少_{クシテ}而絶_ニ惡_ス斯_ノ技_ヲ。

注目されるのは信遍が若い時に俳諧を「絶惡」した点で、これは次の「子姪」の記事とも通じる。

はやうその師たる人みたりよたりにとひきはめ、あるはその戯にふける人々とみそかにむしろをともしして点とりなどいへる事をも申あまり、三十四十ばかりして試侍りし。これは勝まけを興ずる事にて侍

れど、心とどむるばかりもなく、なげにのみして、
うかべる雲のごとくしはべりしかし。

信遍の周囲には俳諧を嗜む同僚は大勢いたはずで、彼が試みに点取をやろうと思えばたちどころに連衆が出来る。信遍若年の作を残念ながら見出ししていないが、一旦手を染めてから批判するという態度は評価されてよい。

また、「夫詩変^{シテ}而為^リ騷。為^リ賦^ト。為^リ詩餘^ト。為^ル吟曲俚諺^ト。俳諧亦爾々。今、之人情物態、之変自^{カラ}見^ユ。」の一節は、「子姪」の「もろこしの詩をもて我國の歌になずらへたれば、これも詩餘孝曲俚謡などの類を引いていはば、似ずともちかかるべし」と重なり、人情を映すという点で前引の②にも通い合う。信遍は和歌から連歌そして俳諧と時勢によって変化してゆく文芸の流れを否定せず、むしろ今の俳諧には日常生活に根ざした人情が濃密に織り込まれていると見る。しかしその俳諧が、俗の領域にとどまることにあきたらず、当代文芸の代表のような表情で和歌と肩を並べるかのような主張を提示し始めると、信遍の神経では我慢がならなかった。詩歌論では徂徠学派として異例なほどに柔軟であった信遍が殊更のように復古を持ち出すのも、低俗に流れる一方に見え

る俳壇へ、一つの指針を与えるつもりだったのか。そして何よりも俳人自身の人間性・誠実さにかかる部分が大きいことを教戒として言い遺す必要を感じたのかもしれない。

注

- 1 以下、引用は『片玉集』所収の本文に拠る。
- 2 二字分欠字。
- 3 拙稿「風雅和歌集の復権——江戸冷泉派歌論断章——」(『日本文学研究』へ梅光女学院大学) 第二十五号、平成元年十一月)。
- 4 拙稿「成島信遍年譜稿(六)——享保十四年～二十年——」(『広島大学文学部紀要』第五十六卷特輯号一、平成八年十二月)。
- 5 楠元六男氏『享保期江戸俳諧攷』(新典社、平成五年五月)二七二頁、四三五頁参照。
- 6 引用は山口大学附属図書館棲息堂文庫蔵本(請求番号九一・三〇八/K二六)に拠る。ただし原文には句点のみ施され、一切の訓点が付されていないので、句点は原文に従い、訓点を私に補った。この処置は「題俳諧不改楽」においても同様である。
- 7 引用は松宇文庫蔵本(請求番号 家六九二)に拠る。ただし国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムを使用した。
- 8 拙稿「江戸冷泉門と成島信遍」(『近世文芸』四十四号、昭和六十一年六月)